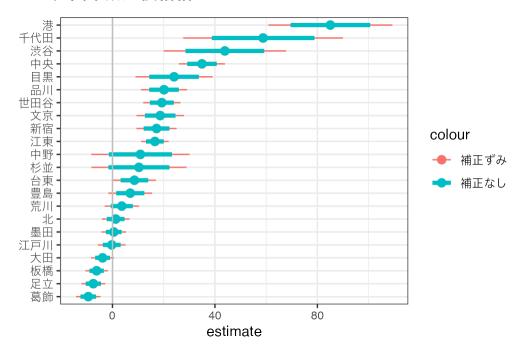
バランス後の比較 機械学習

川田恵介 東京大学 keisukekawata@iss.u-tokyo.ac.jp

2025-10-21

1 分析例

1.1 23 区間不動産価格格差



1.2 指導教員からの"コメント"

• 「区の魅力"ではなく、取引される物件の性質の違いを反映しているだけではないか?」

1.3 バランス表

gtsummary::tbl_summary(
 data,

```
by = District
)
```

Characteristic	港区 N = 283¹	練馬区 N = 278¹		
Price	86 (40, 150)	34 (24, 50)		
Size	50 (25, 75)	50 (25, 65)		
Tenure	19 (11, 23)	20 (9, 32)		
Distance	6.0 (3.0, 8.0)	7.0 (4.0, 10.0)		
RoomNumber				
1	153 (54%)	119 (43%)		
2	82 (29%)	59 (21%)		
3	48 (17%)	88 (32%)		
4	0 (0%)	12 (4.3%)		

¹ Median (Q1, Q3); n (%)

・「中央値(50%) (下位 25%, 上位 25%)」を表示

1.4 可能性

- 練馬区の方が、駅から遠く、築年数が古く、狭めの部屋が取引される傾向
 - ▶ 地区に関わらず、取引価格が低い傾向
- 同じような物件で比べれば、港区との格差は縮まるのではないか

1.5 R の例: 単純比較

```
estimatr::lm_robust(
  Price ~ District,
  data)
```

```
| Estimate Std. Error t value | Pr(>|t|) | CI Lower | CI Upper | (Intercept) | 123.21555 | 7.854036 | 15.68818 | 3.143109e-46 | 107.7885 | 138.64258 | District練馬区 | -85.05972 | 7.934338 | -10.72046 | 1.631327e-24 | -100.6445 | -69.47496 | DF | (Intercept) | 559 | District練馬区 | 559 |
```

1.6 R の例: Size, Tenure, Distance をバランス

• OLS を用いたバランスが可能

```
estimatr::lm_robust(
  Price ~ District + Size + Tenure + Distance,
  data)
```

```
Estimate Std. Error t value
                                                Pr(>|t|)
                                                         CI Lower
             37.921304 6.1745184 6.141581 1.556690e-09 25.793070
(Intercept)
District練馬区 -63.875987 4.4707171 -14.287638 1.136352e-39 -72.657548
Size
              2.698450 0.2130456 12.666069 1.754278e-32 2.279977
Tenure
              -1.841204 0.2164363 -8.506909 1.660098e-16 -2.266336
               -3.180468 0.7897796 -4.027032 6.433225e-05 -4.731784
Distance
               CI Upper DF
(Intercept)
             50.049539 556
District練馬区 -55.094427 556
Size
               3.116922 556
Tenure
              -1.416071 556
Distance
              -1.629151 556
```

• Size, Tenure, Distance を"バランス"すると、練馬/港区間格差が 2118 万円縮まる

1.7 What if 分析

- 広義には What if 分析 (もし~ならば、どうなるか?) の一部
 - **もし**部屋の広さや築年数、駅からの距離の分布に差がなければ、練馬/港区の価格格 差はどうなるか?

1.8 実際の例

- 合計特殊出生率
 - 出生率の国比較や時系列比較に理由される
 - 年齢構造も異なる
- 合計特殊出生率 = 年齢のバランス
 - $=rac{15$ 歳の女性が一年間で生んだ子供の数15歳の女性人口 +
 - .. + 49歳の女性が一年間で生んだ子供の数 49歳の女性人口

1.9 Takeaway

• 実務で伝統的に用いられてきた方法は、X の数が多い場合には適用不可能

- 重回帰を用いた方法は、ある程度対応可能だが、 X の数が非常に多くなると対応不可能
 - ▶ LASSO は候補になるが、信頼区間の計算困難であり、非実用的
- 次のスライドで、Post-double LASSO を紹介

2 サブグループ法

2.1 推定対象

- Y = Priceの平均値の D =地区間での差
 - ・ ただし、X = 物件の属性の差を無視できるように調整(バランス)
- 実務で最も用いられてきた方法は、サブグループ分析

2.2 特定グループの比較

- 最も単純な方法は、X 同じサブグループ内での比較
- 例: X = RoomNumber のみがバランスの対象

```
estimatr::lm_robust(
    Price ~ District,
    data,
    subset = RoomNumber == 3) # 部屋数3
```

```
| Estimate Std. Error | t value | Pr(>|t|) | CI Lower | CI Upper | (Intercept) | 266.8333 | 27.36748 | 9.750014 | 2.649876e-17 | 212.7052 | 320.9614 | District練馬区 | -216.1174 | 27.42044 | -7.881619 | 9.946072e-13 | -270.3503 | -161.8846 | DF | (Intercept) | 134 | District練馬区 | 134 | Time |
```

2.3 実務での例

- ・ 企業によるデータ分析で、頻繁に用いられる
- 既存店における前年同月
 - ・イオン・グループ

2.4 サブグループ分析

- X の組み合わせごとに、事例をサブグループに分割し、平均取引価格を比較
- 例: *X* = 部屋数

```
# A tibble: 7 \times 4
 平均値 District `X=RoomNumber` 事例数
  <dbl> <chr>
                    <dbl> <int>
  54.3 港区
                        1
                            153
2 25.6 練馬区
                        1
                            119
3 168. 港区
                        2
                           82
                        2
  38.4 練馬区
                            59
5 267. 港区
                        3
                            48
  50.7 練馬区
                             88
7 69.4 練馬区
                             12
```

2.5 サブグループ分析

	.bble: 4 × 4 RoomNumber` 事例	数_港区 事例数	_練馬区 平均	差
	<dbl></dbl>	<int></int>	<int></int>	<dbl></dbl>
1	1	153	119	28.7
2	2	82	59	129.
3	3	48	88	216.
4	4	NA	12	NA

- ・ 注: 単純な平均差は、85.1
- 部屋数が増えるにつれて、平均差は増加傾向にある
 - ・部屋数4については、このデータでは、比較不可能

2.6 サブグループ分析の限界

- Xの組み合わせが増えると、
 - ▶ サブグループの事例数が減る
 - 推定の精度が悪化
 - 練馬/港区のどちらかしかないグループでは、比較不可能
 - ▶ 大量の平均差が計算され、人間が認識できなくなる
- 追加的な仮定のもとで、より単純なモデルの推定を行う方が現実的

2.7 例: X = [Tenure, Distance]

# A tibble: 295 × 5 Tenure Distance 事例数_港区 事例数_練馬区 平均差						差
		<dbl></dbl>	<dbl></dbl>	<int></int>	<int></int>	<dbl></dbl>
	1	1	2	1	NA	NA
	2	1	3	7	NA	NA
	3	1	5	NA	5	NA
	4	1	6	2	NA	NA

5	1	7	1	1	15
6	1	8	NA	2	NA
7	1	10	1	NA	NA
8	1	12	2	NA	NA
9	2	1	1	NA	NA
10	2	2	2	NA	NA
# i 2	85 more	rows			

3 OLS を用いた調整

3.1 よくある例

Table 1

```
estimatr::lm_robust(
  Price ~ District + Tenure + Distance,
  data)
```

```
Estimate Std. Error
                                       t value
                                                   Pr(>|t|)
(Intercept)
              157.806101 14.0949558 11.1959273 2.204229e-26 130.120336
District練馬区 -81.987135 7.4424340 -11.0161722 1.144778e-25 -96.605803
               -1.688495 0.2974546 -5.6764801 2.214360e-08 -2.272765
Distance
               -0.158779 0.9753437 -0.1627928 8.707406e-01 -2.074580
                CI Upper DF
(Intercept) 185.491866 557
District練馬区 -67.368467 557
Tenure
               -1.104225 557
Distance
               1.757023 557
```

• $\beta_D = -81.99$ は、Tenure/Distance をバランスさせた後の比較結果と見做せるか?

3.2 妥当な定式化

- •「十分な事例数 + ランダムサンプルング + "妥当な定式化"」 であれば、 β_D はバランス後の比較結果と一致する
- 妥当な定式化
 - \bullet 適当な β_0, β_1 を選べば、

$$\begin{split} E[Y \mid D, X] &= \beta_0 + \beta_D \times \underbrace{District}_D + \beta_1 \times \underbrace{Tenure}_{X_1} \\ &+ \beta_2 \times \underbrace{Distance}_{X_2} \end{split}$$

3.3 実践上の問題

・ シンプルな定式化は、"妥当な定式化"ではない可能性を疑うべき

- より複雑な定式化を用いれば、妥当な定式化である可能性が高まる
 - ▶ 過剰適合が生じ、推定精度が悪化する
 - 信頼区間自体も"信頼できなくなる"

3.4 定式化の分解

• $E[Y \mid D, X] = \beta_0 + \beta_D \times District + \beta_1 \times Tenure$ $+\beta_2 \times Distance$ $= \underbrace{\beta_D \times District}_{D \in \textbf{B} \neq \textbf{5} \hat{\textbf{s}} \hat{\textbf{m}} \hat{\textbf{m}} (Interest)}$ $+\underline{\beta_0 + \beta_1 \times Tenure + \beta_2 \times Distance}_{X \in \textbf{B} \neq \textbf{5} \hat{\textbf{s}} \hat{\textbf{m}} \hat{\textbf{m}} (Nuisance)}$

Xに関する部分(Nuisance)

3.5 妥当な定式化の前提

- "Interest"が十分に複雑に定式化されている
- Table 1 では、「 $E[Y \mid D=1, X] E[Y \mid D=0, X] = \beta_D$ は一定」を仮定
 - 現実にはおそらく異なる
 - 広めの部屋の方が、港区-練馬区間の格差が大きい
 - 次回以降に対応策を議論

3.6 妥当な定式化の前提

- ・ $E[Y\mid D=1,X]-E[Y\mid D=0,X]$ $\underset{\mbox{\tiny (III)}-\mbox{\tiny FP}}{\approx}$ β_D であれば、
- "nuisance"が十分に複雑に定式化されていれば OK

3.7 例: 二乗と交差項の導入

```
estimatr::lm_robust(
  Price ~ District +
    (Tenure + Distance)^2 +
    I(Tenure^2) + I(Distance^2),
  data)
```

-8.432349524 Distance -5.05103264 4.84203891 -1.0431623 2.973281e-01 -14.562033111 I(Tenure^2) 0.04586426 0.02240533 2.0470245 4.112691e-02 0.001854471 I(Distance^2) 0.09347738 0.15968225 0.5853962 5.585197e-01 -0.220179312 Tenure:Distance 0.16577952 0.10777625 1.5381823 1.245750e-01 -0.045920551 CI Upper DF (Intercept) 275.50040940 554 District練馬区 -68.34076314 554 Tenure -1.66908090 554 4.45996783 554 Distance I(Tenure^2) 0.08987405 554 I(Distance^2) 0.40713408 554 Tenure:Distance 0.37747959 554

3.8 実践上の問題

- X の数が多い場合、二乗項や交差項を導入すると、変数の数が爆発的に増える
 - *X* = [Size, Tenure, Distance, Room Number] について、二乗項や交差項を作成すると 15 個の β を推定する必要がある
- 過剰適合が生じ、推定誤差の拡大や信頼区間が信頼できなくなる等の問題が生じる

3.9 LASSO?

- ・ OLS に比べて、LASSO は複雑なモデルの推定に"適している"
 - ▶ 推定精度を改善できる
- 基本的に、信頼区間がうまく計算できない
 - ► データと推定結果の関係性が、OLSに比べて"複雑であり"、どう計算すれば良いか、 現状でも議論が続いている

3.10 Takeaway

- 目標: 「母集団におけるバランス後の比較結果」について、**概ね正しい結論**を得たい
- ・ OLS を用いた暫定的結果は、
 - ▶ 港区と練馬区の取引価格の平均格差は、6947 ~ 1 億 65 万円程度
 - ▶ [Tenure, Distance]をバランスした場合、6834 ~ 9856 万円程度
 - ▶ [Tenure, Distance, Size, RoomNumber]をバランスした場合、404 ~ 2348 万円程度

3.11 Takeaway: Positive

- ・ バランスさせたい属性 X が少数であれば、OLS は有力な選択肢
 - ・ 仮定: $E[Y \mid D=1, X] E[Y \mid D=0, X] = \beta_D$ も緩めることができる
 - ただし伝統に用いられてきた定式化は単純すぎることが多いので、二乗項や交差項を導入すべき
- LASSO は信頼区間の計算が難しいという問題を持つ

3.12 Takeaway: Negative

- バランスさせたい属性 X が多い場合、OLS も LASSO も問題がある
- ・ OLS は、複雑なモデルの推定に向かいない
- ・ LASSO は、引き続き信頼区間の計算が難しい

3.13 Reference

Bibliography